

2025年8月17日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所:エレミヤ書 49 章 7~22 節(旧約 P1384、エレミヤ書講解
説教 81 回目)

タイトル:「エドムについての預言」

46 章から諸国の民についての預言が語られています。これまでエジプト、ペリシテ、モアブ、アンモンに対する主のことばを学んできましたが、今日はエドムに対する主のことばです。

I. 神のさばきから免れることはできない(7-13)

まず、7~13 節をご覧ください。7 節には「エドムについて。万軍の【主】はこう言われる。「テマンには、もう知恵がないのか。賢い者から分別が消え失せ、彼らの知恵は朽ちたのか。」とあります。

エドム人は、巻末の地図 6「イスラエル王国とユダ王国」を見ていただくとわかりますが、死海の南東、モアブの南に住んでいました。彼らの先祖はヤコブ(イスラエル)の兄のエサウです。ですから、イスラエル人とは最も親しい関係にあった民族と言っても良いでしょう。彼らは文字通りイスラエル人(ヤコブ)とは兄弟だったのです。それなのに彼らは、歴史上、イスラエルと争いを繰り返し、ついにその名がイスラエルに敵対する異邦人諸国の象徴となりました(エゼキエル 35:1-15)。そんなエドムについて、語られた主のことばがこれです。

「テマンには、もう知恵がないのか。賢い者から分別が消え失せ、彼らの知恵は朽ちたのか。」

「テマン」はその地図にボツラという地名が出てきますが、その南方

約 20 キロメートルにある町です。創世記 36 章 11 節を見ると、テマンはエサウの孫の 1 人の名前として出ています。ヨブ記にはヨブの 3 人の友人が登場しますが、その 1 人がテマン人でした。何という人ですか？そうです、テマン人エリファズですね。彼はこのテマンの出身でした。まさにテマン人は知恵者として知られていたのです。そのテマンに対して主はこう仰せられました。「**テマンには、もう知恵がないのか。賢い者から分別が消え失せ、彼らの知恵は朽ちたのか。**」どういうことでしょうか。そうした人間の知恵によっては神のさばきを免れることができないということです。どんなに知恵があっても、人間の知恵によっては神の怒りから救われることはできないのです。

8 節をご覧ください。今度は「**デダン**」という町が出てきます。「**デダンの住民よ、逃げよ。そこを離れよ。深く潜め。わたしが彼の上にエサウの災難を、彼を罰する時を、もたらすからだ。**」

「**デダン**」は、エドムの南東、アラビア半島の北部にあった町です。テマンがエドムの北にある代表的な町なら、デダンは南にある代表的な町でした。今日のサウジアラビアではないかとも言われています。このデダンの住民に対しては何と言われているか？デダンの住民に対しては、そこから離れるように警告されています。なぜなら、そこも神のさばきを受けることになるからです。このデダンはかつて商業都市として栄えた町でした。産物も豊富で、経済的に豊かな所でした。そこから離れるようにというのです。知恵で有名なテマンも、商業で有名なデダンも、神のさばきを逃れることはできないからです。いくら知恵があっても、いくら経済的に豊かであっても、そうした人間的なものによっては神の怒りから逃れることはできないのです。

9 節には、その神のさばきの徹底さがぶどうの収穫にたとえられています。「ぶどうを収穫する者がおまえのところに来るなら、彼らは取り残しの実を残さないだろう。盗人が夜中に来るなら、彼らの気がすむまで荒らすだろう。」

ぶどうを収穫する者は、ぶどうの実を残すことはありません。取り残しがないように収穫するからです。主はそのようにエドムをさばかれるのです。また、夜中に来る盗人は気が済むまで奪っていきます。そのように主はエサウを裸にし、その隠れ場をあらわにするのです。

11 節には「おまえのみなしごたちを見捨てよ。わたしが彼らを生かし続ける。おまえのやもめたちや、わたしに抛り頼まなければならない」とあります。

みなしごたちややもめたちは保護されなければならない対象ですが、そのみなしごややもめたちを見捨てよと言うのです。どうしてでしょうか。神の激しいさばきが臨むからです。ですから彼らにはそんな余裕さえないのです。

それゆえ、主はこう仰せられます。12 節です。「見よ。その杯を飲むように定められていない者でも、それを必ず飲まなければならないのなら、おまえだけが罰を免れられるだろうか。罰を受けずにはすまされない。おまえは必ず飲まなければならない。」

「その杯」とは神の怒りの杯のことです。その杯を飲むように定められていない者とは、イスラエルの民とは何の関係もない民、すなわち、異邦人のことを指しています。そのような者でさえ神の怒りの杯を飲まなければならないとしたら、まして神の民イスラエルと兄弟であるエドム人が神のさばきを免れられることは決してありません。どうしてで

すか？彼らは神の祝福に与りながらそれを軽視し、神の祝福を求めた弟ヤコブに敵対したからです。エサウはいわゆる肉的な人でした。彼は双子の兄として長子の権利という神の祝福が与えられていたにもかかわらず、一杯のレンズ豆のスープと引き換えにその権利を弟ヤコブに譲ってしまいました。そんなものはいらないと。それよりも美味しいシチューが食べたい。彼にとって霊的祝福はどうでも良いことだったのです。彼の関心はただ食べたり、飲んだりすることだけ、この世のことだけでした。彼は神の祝福を全く価値のないものとみなしていたのです。そういうエサウの性質を受け継いだのがエドム人です。ですから彼らが神のさばきを逃れることは決してないのです。必ず神の怒りの杯を飲まなければなりません。

13 節をご覧ください。ここでは、それは必ず成就するということが言われています。お読みします。「**まことに、わたしは自分にかけて誓う——【主】のことば——。必ずボツラは恐怖のもと、そしりの的、廃墟、そしてこのしりの的となる。そのすべての町は、永遠の廃墟となる。**」

「わたしは自分にかけて誓う」とは、100%それを成し遂げるという意味です。「ボツラ」は先ほどの地図にもありますが、エドムの首都でした。そこは今「ペトラ」と呼ばれている要塞都市で、世界遺産として有名な場所です。皆さんの中にはご覧になられた方もおられるかもしれません。1989年の映画『インディ・ジョーンズ／最後の聖戦』の舞台にもなった町でもあります。そこはかつて繁栄を極めた町でした。なぜなら、そこは16節に「**岩の裂け目に住む者、丘の頂を占める者よ**」とあるように、自然の要塞となっていたからです。どんな敵が攻めて来ても攻め入ることができない難攻不落の町だったのです。つまり、軍事的にも優れていたということです。彼らはそのことも誇っていました。さ

らに、後で写真を見ていただくとわかりますが、建築物のほとんどは岩山を削って造られたものです。そこに独創的な貯水システムも造られました。つまり、彼らは建築技術も優れていたということです。しかし、そんなボツラも永遠の廃墟となると、主は言われました。

不思議なことですが、今ボツラ(ペトラ)は文字通り廃墟となっています。そこにはだれも住んでいません。かつては交易の中心地として、数万人が暮らしていましたが、今は人っ子ひとりいません。それゆえ、謎の古代都市と呼ばれているんです。ボツラはどのようにして没落したのか。13 節にある通りです。ボツラは必ず恐怖のもと、そしりの的、廃墟、そしてののしりの的となると。そのすべての町は、永遠の廃墟となるのです。そのことばの通りになったのです。

誰もこの神のさばきから免れることはできません。テマンのようにどんなに知恵があっても、デダンのようにどんなに経済的に豊かであっても、ボツラのように軍事的に優れ、高度な建築技術、科学技術を持っていたとしても、この神の怒りから逃れることはできないのです。いったいどうしたら良いのでしょうか。

そのためには、本当の岩であられる主に身を避けなければなりません。詩篇 2 篇 12 節にこうあります。「**幸いなことよ すべて主に身を避ける人は。**」

「身を避ける」とは、「投げ頼む」とか、「信頼する」ということです。どこに身を避けるのか、だれのもとに身を避けるのかが重要です。エドム人は知恵や経済、軍事力、科学技術に身を避けましたが、そのようなものは神の怒りから人を救うことはできませんでした。神の怒りから人を救うことができるのは主なる神ご自身だけであって、この主に身を

避けなければなりません。主に信頼しなければ救われないのです。

これが聖書全体を貫いているテーマです。主イエスを信じるなら救われるとそういうことです。なぜ主イエスを信じるなら救われるのでしょうか。なぜ主イエスに身を避けるなら救われるのでしょうか。なぜなら、主イエスこそ私たちが神の怒りから救われるために神が与えてくださった方法だったからです。パウロはこのことをこう述べています。ローマ5章9節です。

「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」

アーメン！「ですから」とは、その前に語られたことを受けてのことですが、その前には「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(5:8)とあります。「ですから」なのです。キリストは私たちがまだ罪人であったとき、私たちの罪のために死んでくださったことによって、神はご自身の愛を明らかにしてくださいました。自分の敵のために死ぬ人がいますか。いません。自分の愛する人のためなら死ぬ人はいるかもしれませんが、自分に背き自己中心に歩んでいる人のために死ぬ人なんてほとんどいないでしょう。しかし神は、ご自身に背を向け自己中心に歩んでいた私たちのために、聖書ではこれを罪と言いますが、そんな罪人のために死んでくださることによって、ご自身の愛を明らかにしてくださったのです。それが神のひとり子イエス・キリストの十字架でした。イエス様は私たちの罪の身代わりとして十字架で死なれることによって、その罪を取り除いてくださったのです。「ですから」です。ですから、今すでにこのキリストの血によ

って義と認められた私たちが、神の怒りから救われるのはなおさらのことなのです。だってそのためにそれだけ大きな神の愛が注がれたのですから。救われないわけがありません。もしあなたがこのイエスをあなたの罪からの救い主として信じるならあなたの罪は赦され、神に義と認められ、神の怒りから救われるのです。イスラエルがエジプトから救われたように。彼らはどのようにエジプトから救われましたか？自分の家の鴨居と門柱に、小羊の血を塗ることによってです。それを見た神はご自身の怒りを過越していかれました。それと同じです。イエス・キリストこそその過越しの小羊なのです。もしあなたの心にこのキリストの十字架の血を塗るなら、神の怒りはあなたを過越して行くのです。テマンの知恵も、デダンの経済も、ボツラの軍事力や建築技術も、この世のいかなるものもあなたを神のさばきから救うことはできませんが、神が用意された神の救いイエス・キリストを受け入れるなら、この神の怒りから救われることができるのです。

毎週火曜日の夜に、家内は以前小学校で英語を教えていた時に教頭をされておられた方に英会話を教えていますが、夏休みに入る最後のクラスが始まる 1 時間くらい前に電話があり、その日は台風で大雨警報も発令されているのでお休みしますとのことでした。「はい、わかりました」と電話を切ると、彼女からすぐにまた電話がありました。「パット先生はおられますか」と。それで家内に電話を代わるといきなり、「パット先生、『神は愛なり』ってどういう意味ですか」と聞いて来られました。それで家内は、「それは、神様は愛です、という意味です」と答えました。すごいなあ、ズバリそのままです。神は愛です。しかし、大切なことだと思ったのか「ちょっと待ってください。家の旦那さんに代わりますから」と言って、すぐに私に代わりました。私たちは驚いて顔を見合

わせました。なぜなら、その日の朝二人でデイボーションをしてお祈りをしたのですが、「今晚は池田さんと英語のクラスがありますが、彼女の心を開いて良い証ができるように導いてください」と祈ったからです。これまでずっと良い関係がありましたが高かなか証することができなかったので、少しでも証ができるように、そういう機会を与えてくださいと祈ったら、何と向こうから「神は愛なり」ってどういう意味ですかと聞いてきたのです。すごいですね、神様は。私たちは彼女の心を動かしたり、開いたりすることはできませんが、神様にはできます。神様は彼女の心を開いてくださいました。

それでお話をお聞きしたところ、数年前にお亡くなりになった彼女の旦那さんの親友が山形に住んでおられ、最近その方から 97 歳で亡くなられたその方のお母様が毛筆で書かれた短冊をいただいたそうです。そこに書いてあったのがこのことばだったのです。「神は愛なり」。聞くと、そのお母さんはクリスチャンだったそうです。こういうこともあるんだなあと感心しながら、私はできるだけわかりやすくお話したつもりですが、イエス様を信じていない方に神の愛をお話するのはほんとうに難しいなあと改めて感じました。なぜなら、その愛は私たちには持ち合わせていないものだからです。

電話を切った後で、もっとわかりやすく伝える方法はないかと考えているうちに、そうだ、三浦綾子さんが書かれた「塩狩峠」を読んだらもう少しわかるのではないかと思い、それを購入して郵送しました。9月の夏休み明けまでお読みください。その時に感想を聞かせてくださいと。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。

それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3:16)

この神の愛を信じるなら、あなたも神のさばきから救われます。あなたが神のさばきから逃れる唯一の道は、あなたのために十字架で死なれた神の御子を信じる以外にはないのです。たとえあなたがエドムのようにイスラエルと兄弟であっても、たとえあなたがクリスチャンホームに生まれ育ったとしても、たとえあなたにクリスチャンの友人がいたとしても、そのようなことはあなたが救われることとは何の関係もありません。あなたがこの神のさばきから救われるためには、あなたのために十字架で死んでくださったイエスを救い主と信じなければなりません。主イエスを信じるなら、主イエスに身を避けるなら、あなたもこの神のさばきから逃れることができます。

Ⅱ. エドムの高慢を砕かれる主(14-18)

いったいエドムの問題は何だったのでしょうか。14～18節をご覧ください。「49:14 私は【主】から知らせを聞いた。「使者が国々に送られた。『集まって、エドムに攻め入れ。戦いに向けて立ち上がれ。』49:15 見よ。わたしがおまえを国々の中の小さい者、人に蔑まれる者としたからだ。49:16 岩の裂け目に住む者、丘の頂を占める者よ。おまえの脅かしと高慢は、おまえ自身を欺いている。鷲のように巢を高くしても、わたしは、おまえをそこから引きずり降ろす。——【主】のことば。」49:17 エドムは廃墟となり、そこを通り過ぎる者はみな呆気にとられ、そのすべての打ち傷を見て嘲笑する。49:18 ソドムとゴモラとその近隣の町々が破滅したときのように——【主】は言われる——そこに人は住まず、そこに人の子は宿らない。」

主は国々の間に使者を送り、エドムとの戦いに立ち上がるようにと命じておられます。なぜなら、主が彼らを砕かれ、国々の中であって小さい者、人に蔑まれる者とするからです。それは彼らが高ぶっていたからです。16 節には「[岩の裂け目に住む者、丘の頂を占める者](#)」とありますが、これは先ほど申し上げたように、彼らが要塞を誇っていたことを表しています。写真をご覧ください。



引用:ナショナルジオグラフィック「謎の古代都市ペトラ、砂漠の世界遺産」

これは最近のペトラ(ボツラ)の写真です。写真の中にいる人たちはそこに住んでいる人ではありません。観光客です。見ておわかりの通り、そこは岩だらけです。そのように自然の要塞となっているため、エドム人はここは難攻不落だと誇っていたのです。これは前回のアンモン人と同じですね。彼らは谷を誇っていましたが、エドム人は岩を誇っていました。彼らは自分たちの知恵、経済力、軍事力、要塞を誇り、こうしたものを鼻にかけていたのです。



(引用:世界遺産マニア、「ヨルダンの世界遺産」)

この写真などもきれいですね。これも人が意図的に作ったものではなく、水の侵食により自然に形成されたものだそうです。この先に見えてくるのが、アル・ハズネと呼ばれる宝物庫で、『インディ・ジョーンズ／最後の聖戦』の舞台となった所です。いつか行ってみたいですね。

しかし主は、そんなエドム人の高慢を砕かれます。16 節にあるように、彼らが鷲のようにどんなに巢を高くしても、そこから彼らを引きずり降ろされるのです。そこはかつてソドムとゴモラとその近隣の町々が破滅したときのようになります。ソドムとゴモラは、エドムの北にある町です。かつてアブラハムとロトの時代にソドムとゴモラが滅ぼされたように、エドムも滅ぼされることになるのです。ソドムとゴモラはどのように滅びましたか。完全に滅びました。そのようにエドムも完全に滅ぼされるのです。18 節の最後のところに、「そこに人は住まず、そこに人の子は宿らない」とは、そのことを表しています。完全に廃墟となるのです。

特筆すべきことは、エドムには将来の回復の預言が与えられていないことです。そうです、この預言の通り、エドムは完全に滅亡すること

になります。この後でバビロンによって滅ぼされると、紀元前 4 世紀に砂漠の民であるナバデア人の侵略を受けることになります。それで彼らはユダの南方のネゲブに逃れるのですが、そこでユダヤ人の中に組み込まれていきました。そしてその地で彼らはイドマヤ人と呼ばれるようになるのですが、イエス様が生まれた頃、ローマ帝国の支持を取り付けてユダヤ、サマリア、ガリラヤを治めたのがヘロデ大王です(前 37-4 年在位)。マタイ 2 章 1~22 節には、イエス様が生まれた時、東方の博士たちから、ユダヤのベツレヘムにユダヤ人の王が生まれたと聞いて動揺し、その周辺一帯の 2 歳以下の男の子を皆殺しにしたという話は有名です。(マタイ 2:1-22)。しかし、A.D70 年にローマがエルサレムを滅ぼしてからは、各地に散らされて消滅していきました。彼らが一つの民として存在することはなくなったのです。ここに預言されてある通りです。

そういう意味では、高慢の罪がどれほど恐ろしいものであるかがわかるかと思います。私たちも自分の中にエドム人のような高慢がないかどうか吟味しなければなりません。私たちの中には好色とか、淫乱といった罪とは無縁だという人がいるかもしれませんが、でも高慢の罪と無縁だという人がいるでしょうか。エドム人の高慢は対岸の火事ではありません。そのように者は鷲のように巣を高くしても、引きずり下ろされることになるということを覚えておかなければなりません。

Ⅲ. そこに選ばれた人を置く(19-22)

最後に、そのために神は選ばれた人を置かれるということを見て終わりたいと思います。19~22 節をご覧ください。19 節をお読みします。「49:19 「見よ。獅子がヨルダンの密林から常に潤う牧場に上って

来るように、わたしは一瞬にして彼らをそこから追い出し、選ばれた人をそこに置く。だれがわたしのものであるだろうか。だれがわたしを呼びつけるだろうか。だれがわたしの前に立つことができる牧者であろうか。」

このエドム人の滅亡についての言及は、それだけでは終わっていません。ここに、それがどのようにして成されるのかも預言されています。それは、獅子がヨルダンの密林から常に潤う牧場に上って来るように一瞬にしてそこから追い出されることになります。ヨルダンの密林にはかつて獅子、ライオンが住んでいました。ライオンが襲って来て牧場に上って来るように、それは一瞬にして起こるのです。この獅子は何を表しているのかというと、バビロンの王ネブカドネツアルです。ネブカドネツアル王率いるバビロン軍が獅子のようにエドムに襲い掛かり、彼をそこから追い出すことになるのです。

だれがそれをなされるんですか。それをなされるのは主です。ここには「わたしは一瞬にして彼らをそこから追い出し、選ばれた人をそこに置く。」とあるとおりです。第三版では「わたしは一瞬にして彼らをそこから追い出そう。わたしは、選ばれた人をそこに置く。」と訳しています。「わたし」ということばを繰り返してそのことを強調しているのです。そのために主は選ばれた人をそこに置かれるのです。それは誰ですか？そうです、ネブカドネツアルです。神はご自身の怒りの器として、エドム人をさばく道具として彼を選び、そこに置かれるのです。彼は異邦人の王ですが、神はそのような未信者でもご自身の目的のために用いられるのです。たとえ未信者であろうとも、そのために神は選びそこに置かれるのです。

同様に神はあなたを打つために、あなたを懲らしめてもっと謙遜に

なるために、あなたを練りきよめてイエス様のような人に造り上げるために、選ばれた人を置かれるのです。それはあなたのノンクリスチャンの伴侶かもしれません。あるいは、ノンクリスチャンの両親であったり、職場の上司や同僚、部下かもしれません。あなたの親しい友人かもしれません。それがだれであっても、神はあなたを打つために、あなたのそばにそのような人を置いておられるのです。それが神によって選ばれた人です。

ダビデのために神はサウルを選ばれ、そこに置かれました。ダビデがあんなに偉大な王になれたのは、サウルがいたからです。サウルがいなかったらあんなに偉大な王にはなれなかったでしょう。だからそこから逃げないでください。あなたにも神が選ばれた人がちゃんといますから。その人を憎んではいけません。ダビデはサウルをどのように見ていましたか？ダビデはサウルを、神が選ばれた器として認めていました。だからダビデは何度もサウルを討つチャンスがあったのに、神が油注がれた人に手を下してはならないと言って、決して自分から手をくだそうとはしなかったのです。それはダビデがそのために神が選ばれ、そこに置かれたと認めていたからです。

それはあなたにも言えることです。嫌だなあ、辛いなあ、苦しいなあと思うことがあっても、それはあなたに必要な人として神が選ばれ、神がそこに置いておられるのです。こんな人さえいなければ！と言わないでください。その人はあなたに必要な人なのです。必要でなかったらあなたの前に置かれることはなさいません。あなたから取り去られるでしょう。あの人がいるから、この人がいるから、私は教会に行きたくないんですというのは、とんでもない誤解です。神が置いてくださったのです。私たちが選ぶのではありません。神が選んでくださり、神が

置いておられるのです。

それは人だけではありません。あなたの人生に起こる災難と思えるようなあらゆる出来事にも言えることです。どうしてこんなことが起こるのか、なぜこんな病気になってしまったのか。できればこの苦しみの杯を取り除いてほしい。でもそれは神が選んでそこに置いてくださったのです。あなたの成長のために。あなたがもっと深く神を知るために。あなたがへりくだって神を求めるために。詩篇 119 篇 71 節にはこうあります。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれでああなたのおきてを学びました。」

「苦しみ」は、できれば避けて通りたいものです。しかし、その苦しみを通して今まで見るところがでしなかつたものを見ることができるなら、ほんとうの意味で神のおきて、神のみこころ、神ご自身を知ることができるなら、それはすばらしいことではないでしょうか。そのために神はネブカドネツアルを選び、あなたのそばに置かれたのです。心配しないでください。神様は決して耐えられない試練にあわせるようなことはなさいません。耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます(I コリント 10:13)。あなたにとって必要なのは、それがどのような人、どのようなことであっても、神様はあなたを愛し、あなたのために働いておられると信じ、それを主のみこころとして受け止めることです。

20～22 節をご覧ください。「49:20 それゆえ、聞け。エドムに対して立てられた【主】の計画を、テマンの住民に対して練られた策を。必ず、彼らは、群れの中の小さいものまで引きずって行かれ、必ず、彼ら

の牧場は彼らのことで恐れ惑う。49:21 彼らの倒れる音で地は震え、その悲鳴は葦の海でも聞こえる。49:22 見よ。彼は鷲のように舞い上がっては襲いかかり、ボツラに敵対して翼を広げる。その日、エドムの勇士の心も、産みの苦しみにある女の心のようになる。」

それゆえ、私たちも聞かなければなりません。エドムに対して立てられた主の計画を。バビロンの王ネブカドネツアルが鷲のように舞い上がって襲いかかり、ボツラに敵対して翼を広げることを。その日、エドムの勇士の心も、産みの苦しみにある女の心のようになります。私たちもエドムのようにならないように自分の知恵や経済、力を誇るのではなく、へりくだって神を求め、神に拠り頼む者でありたいと思います。あなたに対して立てられた主の計画を、はっきりと知ることができますように。